

2013 年 12 月 13 日 発行

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

どなたでもいつの会でも参加できます

11月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和7年8月・9月の2号連載初出作品「ジョセフ・ヒコゾー」を読みました。

「赤い鳥」所収の「ジョセフ・ヒコゾー」は「中村吉麿」の筆名で書かれた幕末漂流者の話である。

「ジョセフ・ヒコゾー」は播磨の濱田村の漁師の子で、嘉永三年（一八五〇）十月二十六日、榮力丸で江戸に上った帰途、下田沖を通り過ぎた頃、二十九日の夕方暴風雨に遭い、漂流する。それは彦蔵十三歳の時のことだった。

その後、十二月二十一日にカリフォルニアに帰る途中のアメリカ商船に救助され、嘉永四年（一八五二）一月二十四日（太陽暦では二月三日）サンフランシスコに入港する。

榮力丸の一行はアメリカの軍艦で香港・マカオへと渡るが、日本に帰ることはできなかった。彦蔵は親切な人たちのお陰で、アメリカに戻り、学校に入り、勉強の機会を得る。アメリカの法律や国際法などを学び、九年ぶりに三十三歳で長崎に着する。

森三郎は「実話」というジャンルでこの話を書いている。では、もとにした話は何なのか。

「ジョセフ・ヒコゾー」には英文の「自伝」がある。これは昭和三十九年（一九六四）、東洋文庫で「アメリカ彦蔵自伝1・2」という書名で出されている（山口修・中川努 訳）。しかし、昭和七年の『赤い鳥』に掲載されているのだから、これよりも前の出版物を参考にしたことになる。

東洋文庫版の「はしがき」によれば、これとは別に、文久二年（一八六二）、「漂流記」上下二冊を刊行している。江戸時代に出版された唯一の漂流記であった。

また、英文の「自伝」上巻はおそらく、明治二十五年（一八九二）刊行、下巻は明治二十八年（一八九五）五月の刊行となっており、その当時すぐに部分訳もされたが、昭和七年に高市慶雄訳の「アメリカ彦蔵自叙伝」（ぐるりあ・そさえて）が出版されているという。森三郎はこの訳本をもとに子ども向けに書き直したのではないだろうか。この時点でいち早くこの題材を取り上げたのは画期的なことである。

十一月の「森三郎の作品を読む会」では、会員から、吉村昭著「アメリカ彦蔵」（一九九九年、読売新聞社）の紹介もされた。「ジョン万次郎」の名はよく知っているが、「ジョセフ・ヒコゾー」の名はここで初めて知ったという声も上がった。

ジョセフ・ヒコゾーがアメリカ領事館付通訳として幕末の日米間の外交交渉に活躍したこと、その後、貿易や「海外新聞」の発行などに活躍の場を移したことなどは、森三郎の話の中には出てこない。

昭和七年八月・九月号の『赤い鳥』で「ジョセフ・ヒコゾー」の話を読んだ（あるいは学校で教師に読んでもらった）時、当時の子どもたちも、幕末の漂流者が九年の後に日本に戻ってくるまでの話を、ハラハラしながら聞いていたかもしれない。尋常小学校の高学年の子どもの中には、すぐに社会に出て、荒波を体感することになる人も多かっただろう。人生の岐路にあつて、言葉にならない不安や悩みを抱えている年齢の子どもたちだ。十三歳で漂流して、外国の知らない土地で知らない言葉に囲まれながら過ごしてきたヒコゾーの話は、励みになったかもしれない。物語としてのおもしろさには欠けるところはあるが、この話は 森三郎さんからの子どもたちへのエールだったのかもしれない。

前回の「蛙」の小野道風もそうであったが、このころから、森三郎には少年の成長する姿や心を描きたいという思いが強かったのではないだろうか。

次回予定 平成26年1月10日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和7年10月号初出作品

「狐」（森三郎童話選集「かささぎ物語」所収）

「最上徳内」